

氏名	う しょうしょう WU XIAOXIAO
学位(専攻分野)	博士(学術)
学位記番号	博甲第875号
学位授与の日付	平成30年3月26日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
研究科・専攻	工芸科学研究科 造形科学専攻
学位論文題目	日本における「瀟湘八景」の受容研究—平安時代から室町時代までを中心に
審査委員	(主査)教授 並木誠士 教授 伊藤 徹 教授 秋富克哉 准教授 平芳幸浩 同志社大学文学部 教授 河野道房

論文内容の要旨

論文は、序章と全7章、および結論からなっている。全体は大きく第一部、第二部にわかれ、第一部が1～3章、第二部が4章～7章で構成されている。

序章では、瀟湘の定義の再確認をする。従来、洞庭湖に注ぐ瀟川と湘川の流域の風景と説明されていたが、「瀟」という字には古代には「清らか」という意味があり、この字が「湘」にかかる形容詞であること、および、実地調査の結果として、八景の中心になっているのが湘川流域であることを明らかにした。この定義の読み替えは、これまで日中の研究者が思い至らなかったもので、おもに文学作品に用いられている語を分析することで新しい知見に到達している。本論は、序章におけるこの見解を実証してゆくことがひとつの目的になっている。

第一部「日本における「瀟湘」イメージの受容—「瀟湘八景」の成立以前を中心に」

第1章「中国における「瀟湘」に関する文化的コンテクスト」では、古代中国の文献を通覧して、瀟湘地域の文学的伝統として「湘妃」伝説と「屈原」伝説からのイメージ形成がなされている点を指摘し、瀟湘地域が古代以来悲劇の伝説の舞台であり、それが早くに絵画化されていた可能性もあることを明らかにしている。

第2章「平安時代における瀟湘地域の文化的コンテクスト」では、第1章で指摘した瀟湘地域の文学的伝統が平安時代にはすでに日本に伝来していることを『文華秀麗集』『経国集』など平安時代の文献から指摘し、いわゆる瀟湘八景図伝来以前にすでに瀟湘地域に関するイメージを日本人が共有していたと論じている。この指摘は、室町時代に中国から瀟湘八景図が伝来して、それにより日本で瀟湘地域についてのイメージが形成されてきたとする従来の研究を実証的に覆すもので、本論文のひとつの大きな成果である。

第3章「平安時代における洞庭湖のイメージについて—神泉苑を中心に」では、前章での指摘を踏まえ日本における造形化を論じる。ここでは、平安時代の諸文献で言及される「漁夫詞屏風」「坤元録屏風」「和漢抄屏風」を分析し、瀟湘地域が平安時代にすでに中国の「名所」として意識されていたこと、そして、神泉苑を、瀟湘地域の中心である洞庭湖を軸とする江南地方の景色に

なぞらえて鑑賞されていたことを指摘する。

以上のように、第一部では、瀟湘八景図という定型化した絵画が成立する以前に、すでに文学の分野で瀟湘地域についてのイメージが形成されて、日本に定着していることを指摘している。これまで絵画作品中心に論じてきた瀟湘八景研究の欠を埋めて、新知見を呈示している。

第二部「瀟湘八景の成立と日本における瀟湘八景の受容」

第4章「中国における瀟湘八景の成立」では、中国における瀟湘八景図の成立について、北宋時代の宋迪が瀟湘八景図をはじめて描いたという従来の通説について、中国における最新の研究成果を踏まえて再検証を加え、宋迪以前にすでに瀟湘八景図が描かれていたことを指摘している。

第5章「『瀟湘八景』の日本への移入—五山文学を手掛かりに—」では、中国で瀟湘八景に言及する『人天眼目』の日本への伝来時期を検証し、これが13世紀円爾弁円の請来書籍に含まれている点から、『念大休禪師語録』を初出とする従来の説よりも20年ほど早くに瀟湘八景についての知識が伝来していた可能性を指摘する。また、五山禅僧の詩文集を博捜することにより、室町時代における瀟湘八景図受容のあり方を詳細に跡づけている。

第6章「室町將軍邸における瀟湘八景の四季化現象について」では、瀟湘八景図が日本で四季の要素と組み合わされるようになる点について、従来のやまと絵からの影響だけを理由にするのではなく、中国においても四季山水図が理想郷への願望をこめて描かれていた点を踏まえ、支配者が理想化する治世のイメージとして、中国以来の伝統を踏まえて室町將軍の会所に描かれたと指摘する。従来の説を踏まえ、そこに新たな視点を導入した見解として、本論文の第二の知見と言える。

第7章「大仙院室中障壁画と東庭についての考察」では、日本における現存作例として大徳寺大仙院室中の瀟湘八景図襖絵をとりあげ、それを礼之間東側の庭園との関連で分析して、両者の密接な関係を示した。

以上のように、第二部では、室町時代における瀟湘八景図の受容について、通説を批判的に捉えて新たな知見を示しており、日本美術における瀟湘八景図の意義について重要な読み替えを迫っている。

論文審査の結果の要旨

本論文は、中国で成立して日本に伝来し、室町時代以降に流行する「瀟湘八景」という画題について、中国における画題の成立、日本への伝来、日本での受容という三つの観点から新知見を交え、詳細に論じたものである。瀟湘八景は、中国洞庭湖周辺の美景をあつかった画題で、日本に伝来して「近江八景」「南都八景」「金沢八景」など日本版の八景を生み出すほどに影響力のあった主題で鎌倉時代以降の多くの絵師が手掛けている。

本論では、以下の三点が重要な新知見となっている。

ひとつ目は、瀟湘八景図が中国江南地方の洞庭湖に流入する瀟川と湘川の流域の美景であるとする説に対して、瀟は湘川にかかる「清らかな」という意味の形容詞である可能性を、古代神話や文学作品を踏まえ、実地調査を加えて指摘している点、二つ目は、瀟湘地域で形成された「湘妃」伝説と「屈原」伝説による悲劇のイメージが文学の分野で早くに形成されており、それが平安時代にはすでに日本に伝来しており、さらに屏風形式で絵画化されていた可能性および神泉苑

を洞庭湖に見立てるなど造形化もされていた可能性を指摘している点、第三に、日本における瀟湘八景図の四季化がやまと絵からの影響だけではなく、中国における理想郷表現の影響も考慮すべきであり、それ故に室町将軍家の邸宅で絵画化されたことを指摘している点である。

申請者は、中国古代の文献、平安時代から室町時代までの日本の文献を博捜することにより上記の結論を導いており、その指摘は説得力をもっている。また、日中だけではなく欧米の新知見を積極的に取り入れている点も評価に値する。

このように、本論文は、従来の美術史研究の通説に対して、実証的な考察を踏まえて新知見を呈示しており、博士論文として十分な価値を有すると判断できる。

なお、本論文の一部は、いずれも申請者の単著である査読付の 2 論文（①②、②は印刷中）および査読無しの論文（③）として、すでに公表されている。

①武瀟瀟：「瀟湘八景」の伝来に関する新知見—平安時代の瀟湘イメージを中心に」（意匠学会編『デザイン理論』70号、2017年、pp.21-34）査読有

②Wu Xiaoxiao : Les mutations d'un paysage chinois dans le Japon de l'époque de Muromachi (1333-1573): a propos des Huit vues de la region Shasho, Les mutations paysagere et patrimoniales de la ville japonaise,2018、受理済（印刷中）査読有

③武瀟瀟：瀟湘八景与日本禅林—从禅寺方丈至将军御所、『汉传佛教文化研究』（宗教文化出版社、2017年、pp.98-113）